取手市埋蔵文化財センター第18回（市制施行35周年、合併1周年記念）企画展

伝説に生きる平将門

平成18年2月21日（火）～4月23日（日）まで

午前10時から午後４時30分まで
（入館は４時まで）

３月４日（土）のみ午後５時30分まで
（入館は５時まで）

＊入館無料

＊休館日／月曜日のみ

平将門の墓との伝説がある仏嶋山古墳（市内岡）

桔梗塚（市内米ノ井）

平親王将門（所蔵・写真提供　坂東市役所）

取手市埋蔵文化財センター

〒302-0007　取手市吉田383　　TEL 0297-73-2010　FAX 0297-73-5003

開催にあたって

今から約1000年前、ここ関東の地を一陣の風となって駆け抜けた武将がいました。その名は平将門、将門の行動は都の人びとを恐れさせた一方で、坂東の地の人には共感をもって受け入れられたところもありました。史実としての将門はただ一つの筈ですが、人びとの心の中に生きる将門は、その時代により、また受け入れる人の立場により、さまざまな姿で私たちの前に立ち現れてきたといえましょう。

ここ取手の地にも、数多くの将門伝説が残されています。そのすべてを紹介することはできませんが、今回の企画展では、市制施行35周年と、合併1周年を記念して、伝説の中に生きてきた将門を紹介します。1000年以上の長きにわたって、人びとの心をとらえて止まなかった将門の魅力の一端に、触れていただければ幸です。

最後になりましたが、今回の記念企画展の開催にあたりまして、ご協力をたまわりました皆様に深甚なる謝意を表して、開催のあいさつとさせていただきます。

平成18年２月

取手市埋蔵文化財センター

講 演 会	**「相馬氏と将門伝承」** 講 師：岡田清一氏（東北福祉大学教授、元取手市史編さん専門委員） 日 時：３月４日(土)　午後１時30分から３時まで 会 場：福祉交流センター多目的ホール（取手市役所敷地内） 定 員：160名、当日受付順
歴史講座	**「平将門評価の移り変わり」** 日 時：３月25日(土)　午後１時30分から３時まで
公開講座 取手市郷土史研究会と共催	**「平将門と佐倉惣五郎　－英雄伝説と義民伝説－」** 日 時：４月１日(土)　午後１時30分から３時まで

※各講座とも講師は埋蔵文化財センター職員、会場はセンター2階講座室、定員40名、当日受付順

将門ゆかりの龍禅寺三仏堂(米ノ井467、国指定重要文化財)の内部特別拝観

日 時：４月14日(金)から16日(日)　午前10時から午後４時まで（入堂は３時30分まで）

展示説明	２月25･26日、３月11･12･26日、４月８・９日　午後2時から ３月25日、４月１日　午前11時から

例　　言

1．このパンフレットは、平成18年2月21日から4月23日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第18回（市制施行35周年、合併1周年記念）企画展「伝説に生きる平将門」にともない、発行されたものです。

2．この企画展の企画とパンフレットの執筆・編集は、当センター職員の飯島章が担当し、その他職員の協力を得ました。

3．この企画展の開催にあたり、次の方々からのご協力とご助言をいただきました（敬称略）。記して深く感謝の意をあらわします。

麻谷光清、飯塚美喜雄、海老原恒久、榎美香、大槻明生、小幡ちい、君島真理子、佐藤勝代、篠原晟、鈴木乗慈、染谷洌、椿文嶺、土佐博文、野口幸子、平本重喜、村上春樹、山崎英太郎、茨城県立歴史館、栄福寺、延命寺、海禅寺、国王神社、桜川市木崎地区、桜川市歴史民俗資料館、佐倉市教育委員会、下総町教育委員会、昌福寺、千葉県立関宿城博物館、千葉市立郷土博物館、長禅寺、筑波大学附属図書館、取手市藤代商工会、取手市立山王小学校、坂東市役所、南相馬市博物館、龍禅寺、命書房出版株式会社

1．歴史の中の平将門

将門が今日歴史に名をとどめているのは、承平・天慶の乱の中心人物であったからです。平将門の乱とも呼ばれるこの戦乱について知る、最も基本的な史料・文献が「将門記（しょうもんき）」です。「将門記」の成立年代については、はっきりしたことはわかりませんが、乱からさほど時を経ないうちに書かれているようです。作者についても不明ですが、将門に同情的な記述から、将門に近い人物が関東で執筆したとも、また朝廷の記録や文書が使われていることから、都で執筆されたとも言われています。

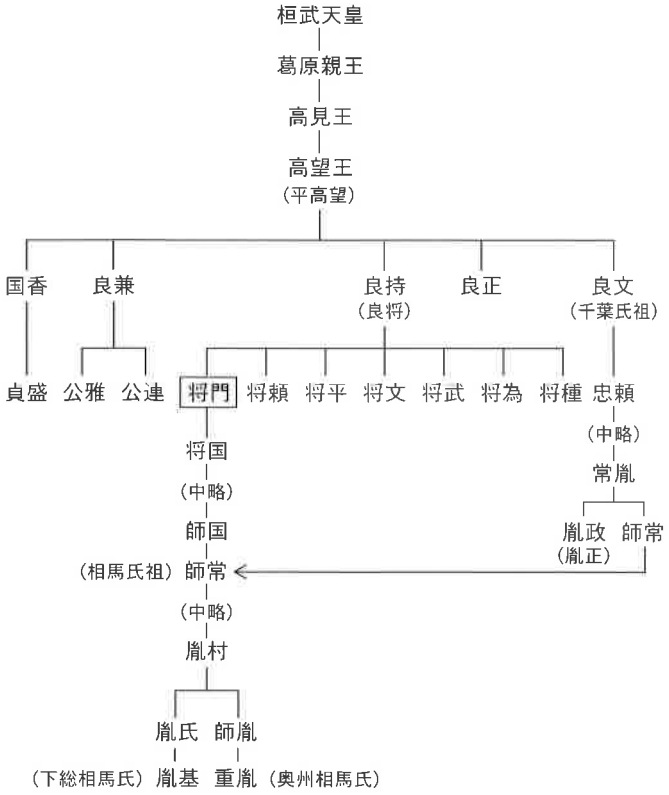
一番古い写本は、名古屋市にある真福寺に伝わっています（国指定重要文化財）。またこれに次ぐものとして、楊守敬旧蔵本があります（同）。これは清国人の楊守敬によって日本にもたらされたもので、数奇な運命をたどった写本といえましょう。江戸時代になると、真福寺本をもとにした刊行本が出されます。「将門記」の題名は、これらの刊行本から広く普及していったものです。

また「将門記」の記述には、中国の故事の引用や、また中国の古典にならった比喩や対句が多く見られます。「将門記」は乱の経緯を知る歴史史料であるとともに、「平家物語」や「太平記」へと発展する軍記物語の最初の作品とも言われています。

鎌倉幕府三代将軍の源実朝は、「将門合戦絵」を画かせて愛蔵していたとされ、武家社会の中では、将門は武家政権の始祖と考えられ、憧憬の念をいだかれていたことがわかります。千葉氏や相馬氏が将門の子孫を称した理由も、まさにここにあります。

しかし江戸時代になると、徳川光圀により水戸藩が編さんした「大日本史」は、将門の伝記を「叛臣列伝」に入れ、大義名分的な立場から天皇への反逆者として扱います。この傾向は、明治維新以降の近代天皇制の確立の動きの中で、ますます強くなります。織田完之は、明治40年（1907）に『平将門故蹟考』を著し、将門の反逆者の汚名をすすごうと努力します。織田の研究や著書は、将門を尊崇し敬愛する心ある人びとに受け入れられました。明治39年、将門の本拠地岩井（現坂東市）で、織田の講演会が開催されました。会場には花火が上がり、猿島郡全体から数百人の聴衆が集まり、講演が終わるや会場は喝采の嵐につつまれたと伝えられています。

桓武平氏、千葉氏、相馬氏略系図



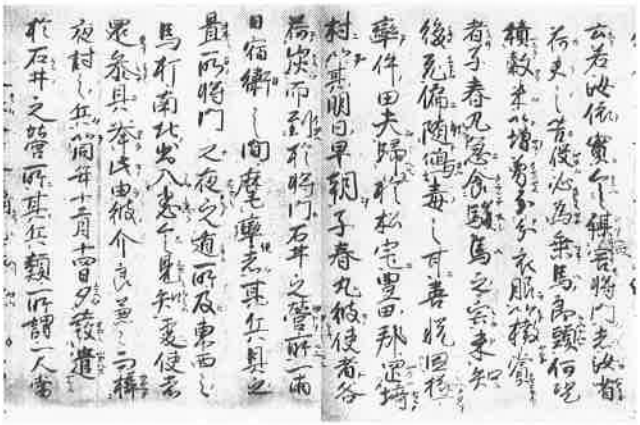
「将門記」、「尊卑文脈」などより作成。左側が兄。

平将門の乱　略年表

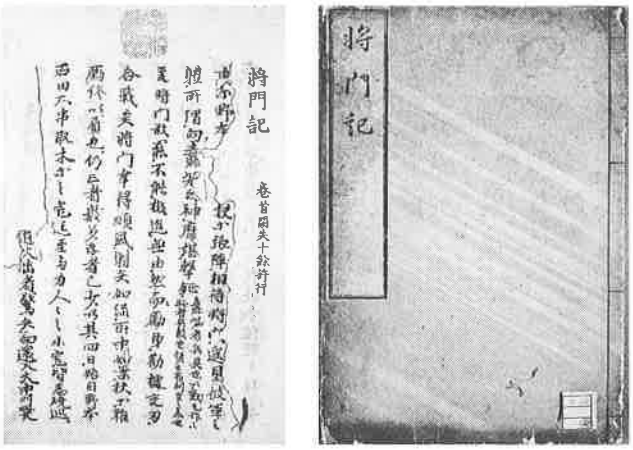
年号	西暦	出来事
延長 9	931	将門、伯父良兼と女性問題で争う
承平 元	931	将門は良文とともに、伯父国香と戦う
2	932	将門は良文とともに、伯父国香と戦う（染谷川の合戦）
5	935	将門は国香、源護と子の扶、隆、繁らと戦う（野本の合戦）
		将門、叔父良正と戦う（川曲の合戦）
		源護、将門を朝廷に訴え、将門に出頭命令が出る
6	936	将門、良兼と下野で戦う
		将門、京に上る
7	937	将門は恩赦により許される
		良兼と戦う、将門が敗れる（子飼の渡しの合戦）
		良兼と戦う、将門が敗れる（堀越の渡しの合戦）
		将門、真壁郡の良兼の屋敷を焼く、良兼は筑波山に逃亡
		将門、弓袋峠に良兼を攻める、勝敗つかず
		良兼、将門の石井の営所に夜討ちをかけるが、敗退する
8	938	将門、上京する貞盛を追い、信濃で戦うが逃げられる
		将門は武蔵権守興世王、介源経基と足立郡司武蔵武芝の争いを調停しようとする
		経基は上京して、朝廷に将門を訴える
天慶 2	939	太政大臣藤原忠平、将門謀反の調査を命じる
		将門は無実の弁明書を忠平に送る
		藤原玄明が常陸介藤原維幾に追われ、将門の下に来る
		将門は維幾の赦免を要求し、常陸国府を焼き払う
		将門、下野と上野の国府を襲う
		将門、忠平に書状を送る
		将門、上野の国府で神託を受け新皇を称する
3	940	朝廷、将門の追討を命じる
		藤原秀郷、貞盛が将門を急襲する
		2月14日、将門討ち死にする

「将門記」などより作成。

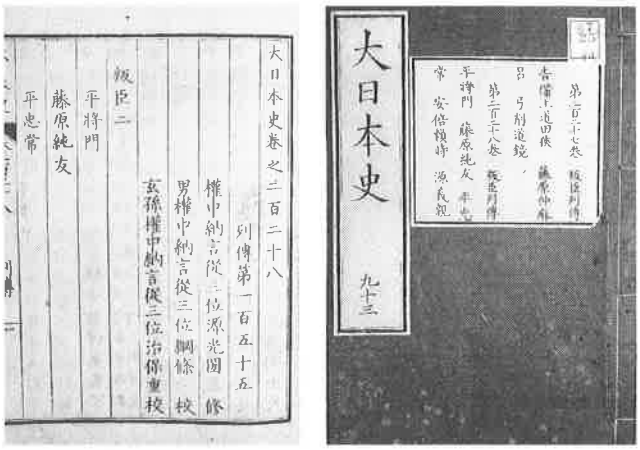
「将門記」（真福寺本、古典保存会複製本、筑波大学附属図書館所蔵）



「将門記」（楊守敬旧蔵本、貴重古典籍刊行会複製本、筑波大学附属図書館所蔵）



「将門記」（寛政11年刊行本、筑波大学附属図書館所蔵）



「大日本史　叛臣列伝」（茨城県立歴史館所蔵）

「日本外史」（山崎英太郎家文書）
将門は都に上り、検非違使の官職を望んだが得られなかったので、反乱を起こしたと書かれ、将門を朝敵と扱っています。

織田完之著『平将門故蹟考』（筑波大学附属図書館所蔵）
左の絵は、現在の東京大手町にある将門の首塚の当時の姿です。

2．将門の子孫　― 千葉氏と相馬氏 ―

関東の武士の中で、将門の子孫を称したのは千葉氏です。千葉氏は、将門の叔父にあたる平良文を祖としています。良文は将門とともに平良兼と戦ったとも、良文・将門・良兼が平国香と戦ったとも、良文と将門が戦ったとも、さまざまな伝説が残されています。一族の内紛の複雑な様相が、こうしたいろいろな敵味方の組み合わせを生んだのでしょうか。

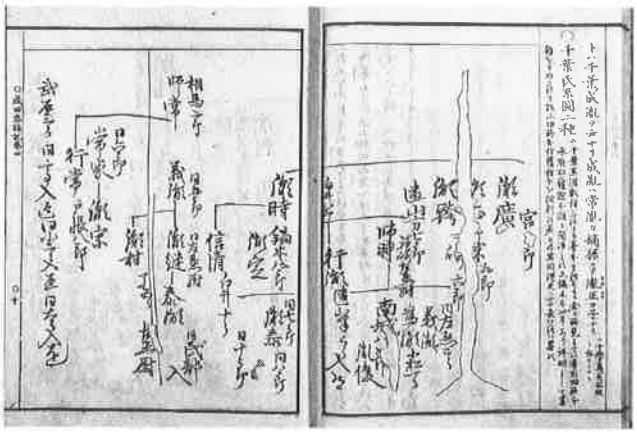
千葉氏は妙見菩薩を信仰し守護神としていましたが、その由来を描いたのが「千葉妙見大縁起絵巻」

です。ここには、良文と将門が上野国の染谷川をはさんで国香と戦った時、童子の姿をした妙見菩薩が現れ、良文と将門を川の対岸に渡してくれたり、矢を拾ってくれたりして、勝利に導いてくれたことが描かれています。しかし、次第に傲慢になった将門の下を妙見菩薩は去って良文の下につき、以後代々の千葉氏の当主を守護し、信仰が伝えられたと、縁起には書かれています。

相馬氏は、千葉常胤の次男の師常を祖とします。師常は、将門の直系の子孫である師国の養子となり、相馬御厨の支配を任されて相馬氏を名乗ったとされています。相馬氏は、後に下総相馬氏と奥州相馬氏の二つに分かれます。元亨（げんこう）3年（1323）、相馬重胤が下総流山から奥州行方郡に移ったのが、奥州相馬氏の始まりとされています。江戸時代になると、相馬中村藩六万石の藩主となりました。

下総相馬氏は、戦国時代は小田原の北条氏についたため、豊臣秀吉による北条氏滅亡により存亡の危機に立たされますが、江戸時代には旗本と小田原藩士の家として存続しました。

毎年7月23日から25日にかけて、福島県南相馬市を中心に行なわれる相馬野馬追は、将門が行なった軍事訓練が始まりで、重胤が伝えたものとされています。昭和48年には、当時の藤代町商工会が中心となって相馬野馬追を招きました。町内を騎馬武者が行列して、小貝川の河川敷で勇壮な神旗争奪戦が催されました。



千葉氏系図（「成田名所図会」、海老原恒久家文書）

高井城跡に鎮座する妙見八幡宮（市内下高井）

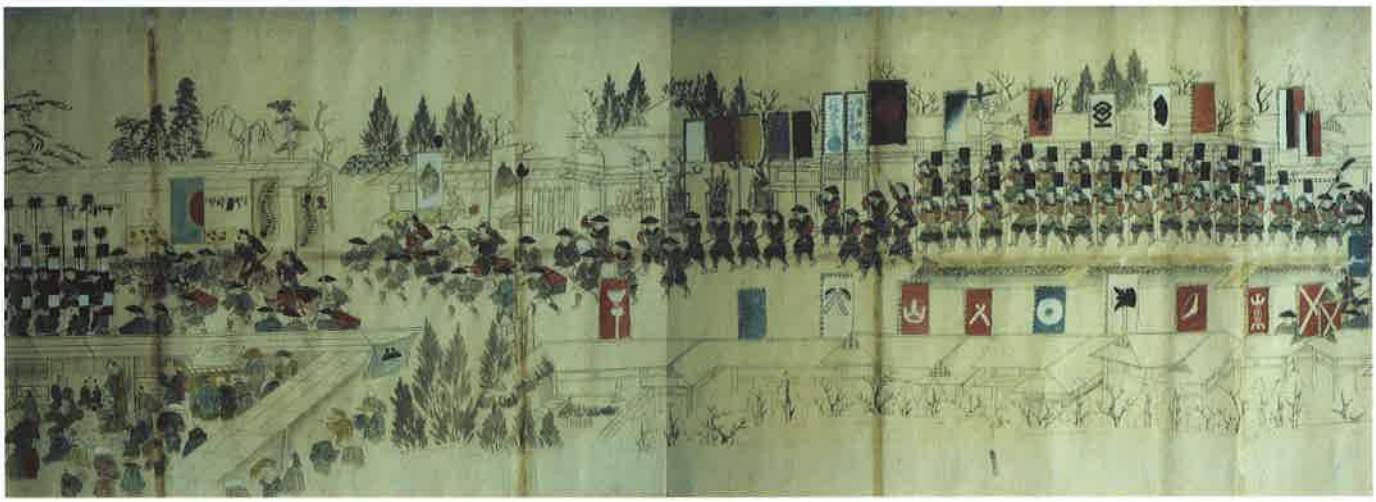
昭和48年に藤代町（当時）で開催された相馬野馬追
町内を進む騎馬武者行列（写真提供　取手市藤代商工会）

昭和48年に藤代町（当時）で開催された相馬野馬追
小貝川河川敷での神旗争奪戦（写真提供　取手市藤代商工会）

3．錦絵に描かれた平将門

江戸時代になると、将門を題材とした文芸作品や錦絵が盛んに作られました。代表的な文芸作品の一つに、山東京伝の「善知鳥安方忠義伝（うとうやすかちゅうぎでん）」があげられます。話の筋は、将門の滅亡後、陸奥国に逃れた将門の娘が、出家して如月尼となって父の菩提を弔っていました。そこへ、異母弟の平太郎良門が筑波山の山中でガマの妖術を学び、父将門の復讐の機会をねらっていることを知ります。そして如月尼も良門

千葉妙見大縁起絵巻（栄福寺所蔵、原本は非公開、千葉県指定文化財、写真提供　千葉市立郷土博物館）
良文と将門の前に、妙見菩薩が現れた場面です。展示では、千葉市立郷土博物館が所蔵する複製を使用します。



相馬之馬追祭図絵巻（所蔵・写真提供　坂東市役所）

平親王将門（所蔵・写真提供　坂東市役所）

瀬田橋上に秀郷龍女を救う図（所蔵・写真提供　坂東市役所）

本朝武者鏡　瀧夜叉姫
（所蔵・写真提供　坂東市役所）

平太郎良門
（所蔵・写真提供　坂東市役所）

今様擬源氏　大宅太郎光国
（所蔵・写真提供　坂東市役所）

百鬼夜行相馬内裏（所蔵・写真提供　坂東市役所）
相馬内裏に出向いた大宅太郎光国（左端）に、瀧夜叉姫（右端）が妖術を使い百鬼を立ち向かわせている場面です。後には三匹の大ガマと将門の霊がいます。

相馬の古内裏（所蔵・写真提供　坂東市役所）
これも、相馬内裏に出向いた大宅太郎光国（中央）に、瀧夜叉姫（左端）が妖術で巨大な骸骨を出現させた場面です。骸骨は、将門の怨霊を象徴しています。

善知関の狭布旗を奪い合いの図（所蔵・写真提供　坂東市役所）
「善知安方忠義伝」を題材とした錦絵です。善知安方（中央）は将門の忠臣六郎公連（きんつら）の子で、良門（右）が狭布旗（けふのはた）を奪おうとするのを、妻の錦木（にしきぎ）（左）と共に渡すまいと争っている場面です。

の妖術で仲間に引き入れられ、瀧夜叉姫と名乗り相馬内裏の再興をはかります。そこに源頼信の家臣（多田満仲の家臣とも設定されます）の大宅太郎光国が訪れ、良門と瀧夜叉姫の野望を打ち砕くと言うものです。「善知鳥安方忠義伝」を歌舞伎に脚色したものが、「世善知鳥相馬旧殿（よにうとうそうまのふるごしょ）」で、その大詰（最終幕）が独立して「忍夜恋曲者（しのびよるこいはくせもの）」となり、現在でも上演されています。

将門そのものや将門の亡霊を主人公とする歌舞伎もありましたが、内容が今に伝わるものはないようです。非業の死を遂げて怨霊となったイメージから、将門本人を取り上げるのにはためらいがあったのかも知れません。

表紙の錦絵は、将門が飛んでいる鳥（雁）をにらむと、鳥が落ちたところを描いたものです。勇猛な武将の、まさに飛ぶ鳥をも落とす力（神通力）を、表現しています。雁が落ちる連想から、近江八景の堅田の落雁を背景にした将門の錦絵もあります。

4．取手と周辺の将門伝説

市域を含む旧相馬郡には、将門にかかわる伝説が数多く残されています。しかしこれは伝説の世界であり、相馬郡と将門を確実に結びつけられる史料は、実はまったくありません。

「将門記」にも、相馬郡の地名が現れるのは、「相馬郡大井の津」ただ１か所です。これは将門が新皇を称して王城を建設しようとした時、京都の大津になぞらえた場所として登場しています。やがて王城そのものが、相馬郡に作られた伝説が生まれます（相馬内裏）。そして王城の場所を、現在の守谷城にあてたりして、将門伝説が作られてきます。また守谷市にある海禅寺の境内には、将門と七人の影武者の供養塔があります。

市内では、寺田の惣代八幡宮は将門の母が崇敬した相馬郡の惣鎮守であるとか、寺田が将門の出生地であるとか言われています。これは、将門の母（良持の妻）は犬養春枝の女で、犬養氏は取手あたりの豪族であるとの説に由来していますが、これとて確たる史料によったものではありません。

他にも市内の寺院や神社には、将門にかかわる伝説が残されています。市内岡の仏嶋山古墳は将門の墓で、近くの大日山古墳は愛妾の桔梗の前の墓とも伝えられていますが、年代的にはもちろん合いません。岡には、岡の藪知らずと呼ばれたうっそうと生い茂った深い藪がありました。ここは将門の墓と伝えられ、根来の覚鑁上人が将門の縁者であることを夢で告げられ、この地を訪れ建立したのが延命寺の始まりと伝えられています。同じようなものに、千葉県市川市の八幡の藪知らずがあります。ここは将門の墓とも、

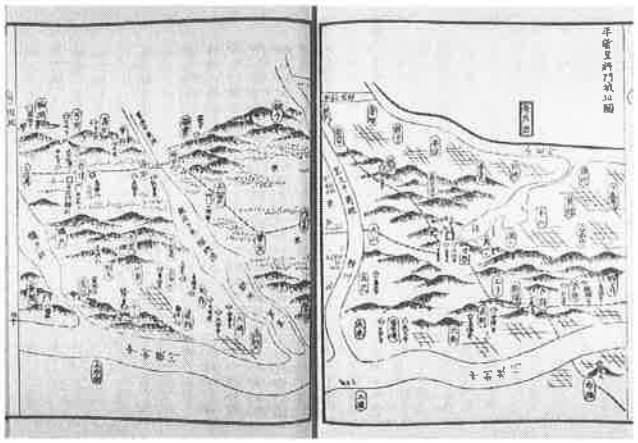
貞盛が陣を敷いたところの跡とも言われ、踏み入ると祟りがあるとされています。

市内の米ノ井には、桔梗塚があります（写真は表紙）。将門の愛妾であった桔梗の前が、将門の討死後ここまで逃れてきて、追っ手の手にかかり亡くなったと伝えられています。非業の死を遂げた桔梗の前の恨みで、桔梗を植えても花が咲かないとか、桔梗を植えてはいけないと言う伝説があります。

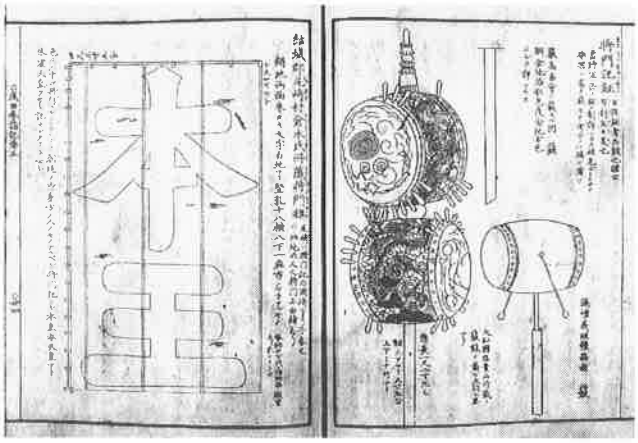
千葉県佐倉市の将門町にも桔梗塚があり、桔梗の花が咲かないと言われています。一帯は将門山と呼ばれ、塚の近くには将門・口ノ宮神社があります。

市内岡の大日山古墳のある一帯は、将門が桔梗の前と一緒に住んだ屋敷跡で、古墳を物見台に使用していたとの言い伝えがあります。またここで桔梗の前が、入水したとも言われています。

千葉県下総町にある昌福寺には、桔梗の前が所持した鏡と懐剣が伝わっています（写真は裏表紙）。赤松宗旦の「利根川図志」によれば、元は同町の東三井寺が所蔵していました。明治になってから東三井寺が廃寺となって、昌福寺に伝えられたものです。



平親皇将門城址図（「利根川図志」、崙書房複製本）

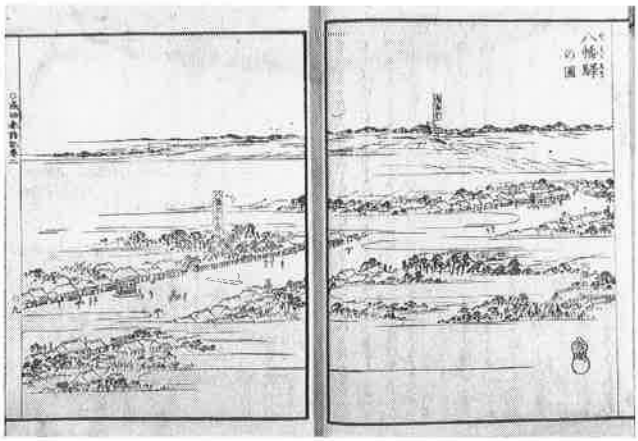


将門記鉦（右）と将門旗（左）の図
（「成田名所図会」、海老原恒久家文書）

海禅寺（守谷市）境内の将門七騎塚
将門（右端）と七人の影武者の供養塔と伝えられています。

惣代八幡宮（市内寺田）

大日山古墳（県指定史跡、市内岡）

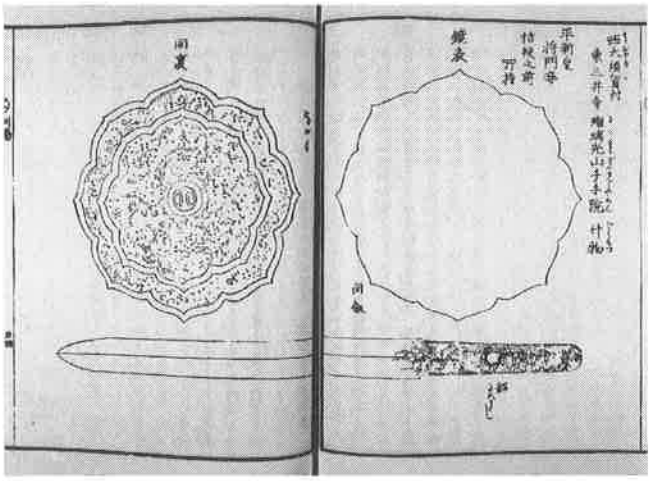


八幡の藪知らず（「成田名所図会」、海老原恒久家文書）

桔梗の前とともに、小宰相と言う女性が将門の愛妾として伝説に出てきますが、両者は同一人物ともされています。「利根川図志」には、小宰相は佐原（千葉県佐原市）の牧野庄司の娘で、将門が竹袋（同県印西市）の城に住まわせていたと書かれています。印西市にある山根不動堂の境内には、小宰相の供養塔が建てられています。

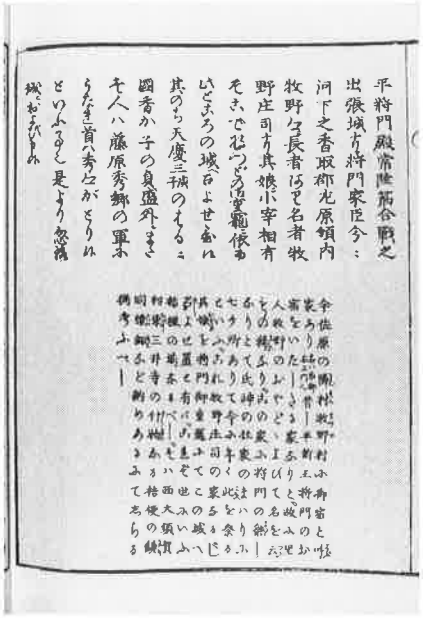
また小宰相は、将門を討つために藤原秀郷が送り込んだ密偵で、秀郷の愛妾であったと言う伝説もあります。そして秀郷によって、口封じのために殺害されたとも伝えられています。

戦乱の中に翻弄された悲劇の女性たちの姿が、桔梗の前や小宰相の伝説を生んだのでしょう。



桔梗の前所持の鏡と懐剣（「利根川図志」、崙書房複製本）

小宰相供養碑
（千葉県印西市山根不動堂境内）
小宰相も将門の愛妾で、桔梗の前とは同一人物と見なされています。享保15年（1730）に女人講の人びとによって建立されたものを、明治24年に再建したものです。



小宰相伝説
（「利根川図志」、崙書房複製本）

千葉県佐倉市将門町にある桔梗塚

5．平将門と佐倉惣五郎

義民として名高い佐倉惣五郎は、将門の子孫との伝説があります。また将門の子孫を称した千葉氏の家臣木内家の出身とも言われ、将門の伝説と深く結びついていることがうかがえます。

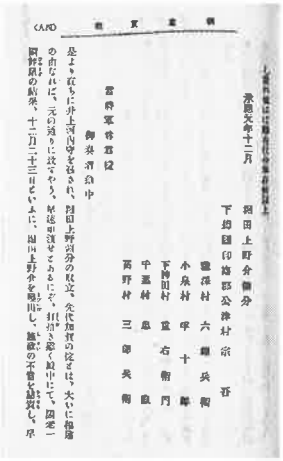
千葉県佐倉市には、将門町と呼ばれる地区があります。ここの将門山には、将門と惣五郎を祭神として祀る将門・口ノ宮神社があります。佐倉市のあたりは、将門の父の良持（将）の所領があったところとも、将門の屋敷があったところとも言われ、惣五郎の屋敷もここ将門山にあったとも伝えられています。将門山に立て籠もった農民一揆を、惣五郎が引き取らせたと言う話があります。

さて惣五郎の直訴物語とは、重税を課す佐倉藩主堀田正信の悪政に対して、惣五郎はじめ領内の名主６名が、苦難の末に上野寛永寺に参詣した４代将軍徳川家綱に直訴し、年貢の減免を勝ち得たものの、惣五郎とその妻、そして幼い子供４人の６人が死罪に処せられたと言うものです。

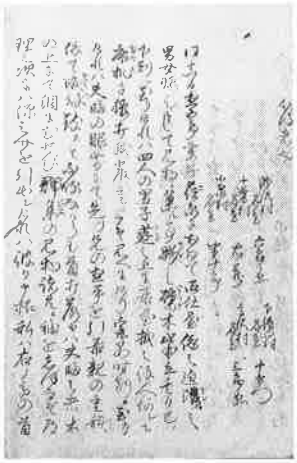
この惣五郎の直訴があったとされる頃、取手市域には佐倉藩の領地だった村がありました。その一つ、小泉村の名主半十郎は、領内の惣代として惣五郎の直訴を助け、直訴後追放の刑を受けました。惣五郎の刑死後は出家して仏門に入り高野山に登り、さらには諸国を遊歴して惣五郎一家の菩提を弔ったと伝えられています。

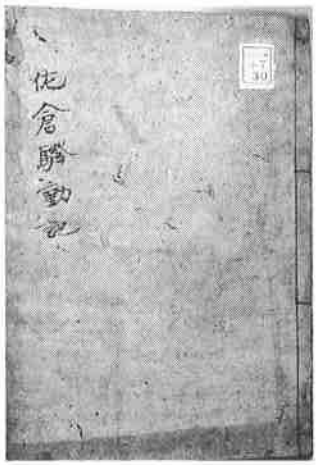
実際の堀田正信は、万治３年（1660）10月、幕政を批判する書を老中に差し出し、無断で江戸から佐倉に帰ってしまいました。そのため領地は没収され、弟の信濃国飯田藩主脇坂安政にお預けの身となりました。翌万治４年の１月、元佐倉藩の村々から年貢を取り立てた幕府の代官は、佐倉藩の年貢が高すぎたとして、２分（２割説と２パーセント説があり）減らしています。

惣五郎の直訴物語には、このような事実が背景にあったことは確実です。人びとの心の中に、我が身を顧みず重税を課す領主に立ち向かい、ついには刑場の露と消えた惣五郎の姿が、将門と重ね合わされたとしても、何の不思議もありません。



『日本之義民　宗吾霊由来記』（個人蔵）
承応元年（1652）12月に、４代将軍徳川家綱宛に書かれた直訴状に、惣五郎とともに小泉村名主半十郎ほか４人の計６人が名を連ねています。





「佐倉騒動記」（茨城県立歴史館所蔵）
小泉村名主半十郎を含む５人の名主が、追放に処せられたことが書かれています。

千葉県佐倉市将門町にある将門・口ノ宮神社

佐倉宗吾の墓（「宗吾霊堂参拝記念絵葉書」、個人蔵）

平将門像（国王神社所蔵、県指定有形文化財、写真提供　坂東市役所）
写真パネルで展示します。

将門后像（桜川市木崎地区所蔵、桜川市指定文化財、
写真提供　千葉県立関宿城博物館）
写真パネルで展示します。

伝桔梗の前所持の鏡と懐剣
（昌福寺所蔵、写真提供　千葉県立関宿城博物館）
写真パネルで展示します。

相馬野馬追の神旗争奪戦
（国指定重要無形民俗文化財、撮影　大槻明生氏、
写真提供　南相馬市博物館）

百姓一揆将門山に立て籠もる場
（「宗吾御一代記絵はがき」、取手市教育委員会所蔵）

「日本之義民　木内宗吾直訴之図」（個人蔵）

取手市埋蔵文化財センター第18回（市制施行35周年、合併１周年記念）企画展

伝説に生きる平将門　平成18年2月21日～4月23日

編集／発行　取手市埋蔵文化財センター　　制作／印刷　(有)トヨプリントサービス